

# グランブルーでハーレムチートなお話（オリ主添え）

愛用のジッポ洗濯マン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

空に幾つもの浮島があり、星の獣と呼ばれる星晶獣が存在し。

割とカジュアルなペースで世界滅亡な危機が押し寄せてくる世界。

これはそんな世界で、インチキじみた性能の危機察知能力を所持した一般通過エルー傭兵が必死こいて生き延び。

なんやかんやあって美少女達と縁を結んだり引きずり回される話である！

# 目次

一般通過傭兵がモフモフ尻尾エルーン娘 達に振り回されるお話	1
一般通過傭兵は銃工房三姉妹に頭が上が らないというお話	14
一般通過傭兵が褐色露出多めエルーン娘 達に連行されるお話	26
一般通過傭兵はいかにしてモフモフ尻尾 エルーン娘達（と男の娘）に懐かれるに 至ったかと言うお話	39



# 一般通過傭兵がモフモフ尻尾エルーン娘達に振り回されるお話

青い空、白い雲、美しく輝く砂浜。

さすがアウギユステ、どこに出しても恥ずかしくないリゾートの装いである。

前にエルステ帝国が進駐してきたり、星晶獣リヴァイアサンがぶつつんして大暴れしたのも今や昔、今では癒しと潤いを求めた人々にとつての憧れの地と言えよう。

ただ、一つ問題があるとすれば。

「ほらボサつとしとつたらアカンよ！ 鯨を撃退せな！」

「ユエルちゃん、先走つたら危ないよ。ラインはん、急がんと魔物に人が襲われてまうよー」

「俺、見なかつた事にしてローアイン特製焼きそばカツ喰らつて不貞寝してえよ……」

訂正、一つじゃなくて二つ……いや三つだわ。

まず一つ、サメが竜巻になって襲い掛かってくるトンチキな状況に、何故か俺とユエルとソシエの3人だけが割り当てられているという事。

二つ目は、なんでサメが竜巻になって襲い掛かってきているのかという事、目を覚ませお前達は空を飛ぶナマモノじゃないだろう。

そして三つ目、なんで俺は察知した危険をあれやこれやして何とかしてきたのに、こんな危機的状況に放り込まれているのだろうか？

そもそも、なんで危機察知と回避くらいにしかな定評のない俺が今や空域に名を轟かせるグランサイファアの一員になんぞなっってしまったているのか。

これにはそう、涙なくしては語れない俺の奮闘が関わっているのである、不条理極まらない上に不本意な事この上ないが!!

俺が道を踏み外した、と言うか俺の人生設計が狂ったのは間違いないあの時だろう。

懇意にしている銃工房に預けていた愛用のリボルバーライフルを引き上げて、意気揚々と入った酒場で目撃したあの一件が全ての元凶であった……。

・  
・  
・

「おいーす、相変わらず流行ってねえなおっさん」

「ぶっ飛ばすぞ変態銃使い、第一おっさんはテメエもだろうが」

「ほーん？ 俺はまだ四捨五入すればピッチピチの20歳だが？ と言うか変態銃使い

呼ぶんじゃねえよ、ちよつと変わった銃使ってるだけだコラ」

「良く言うぜ、ったく……テメエの銃を真似した連中が軒並み大怪我してんだからその呼ばれ方は正当な評価だよ」

「解せぬ」

店主のドラフのおっさんと言葉の応酬を交わしつつ、どつかといつもの席に座り適当なつまみと安酒を頼む。

悲しい事に想定以上に銃のオーバーホールと弾薬やらの消耗品補充で懐が寂しくなったので、このぐらいに抑えるしかないのだ。

「テメエ、まーたこんなもん頼みやがって……たまにはうちの店の売り上げに貢献しろや」

「しょうがねえだろ金欠なんだから、命は金で買えないけど安全は金で買えるんだよ」  
「その安全を買う金の為に金欠になってたら世話ねえな、おらよ」

何が起こるかわからんから、実力を高めつつ備えてるだけというのにこの扱いである。

俺は物心ついた時から人一倍どころか二倍三倍も危険に敏感だった故に、今まで命の危機は数あれど死に直結するような目に遭ってはいないのだ。

しかし、大きくなり見識を広めれば広めるほどこの空には危険が多い事を知り、まあ色々あつて俺は傭兵になった。

正直早まったかも、と思った頃には傭兵を止めれない程度に仕事が増えており今更堅気に戻るのも躊躇する状態だったのは内緒である。

そんなしようもない事を考えながらチビチビと安酒を味わっていたところに、エルーンである俺の耳に酒場の中の喧騒で気になる会話が飛び込んでくる。

なんじやらはい、とそちらへ視線を向けてみれば……随分と露出の多い恰好をした黒髪、珍しい事に尻尾のあるエルーンの少女がドラフの荒くれ達に囲まれていた。

「なあなあ、それホンマなん!？」



「ああ本当だぜお嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんが探してる王家の秘宝、とやらならうちの団がこの前見つけて保管してるぜ。」

つまみである茹で豆を口に放り込みつつ、少女を取り巻く集団の会話の推移を見守る。

いやあ、あの少女も随分と警戒心無さそうだがさすがに気付くだろう。

尻やら太腿に手を伸ばす事まではしてないものの、その視線は丸見えな胸元や太腿に釘付けだしな。

「とつといてくれておおきにな！ その場所に案内してもらてええ？」

「おうよ、お嬢ちゃんみたいな可愛い子ちゃんなら大歓迎だぜ」

「へっへっへ、パーティーもしないといけねえな！」

「いやそこは気づけよさすがに!!」

荒くれ達に呑気にお礼を言い、連れ立って店を出ようとしているその姿に俺思わず全

力で突っ込む。

視線の隅っこで店主のおっさんが顔に手を当ててやれやれとか言ってるのが地味に腹立つ。

「ラインよお、お前危険なんぞごめんだとか言う割にそうやって首突っ込むからいつも金欠になるんだよ」

と言うか口まで出してきやがった、やかましいわ！

「あん？なんだあ、てめえ……」

「おい待てよ！　ライン……それに背中に背負ってるみょうちきりんな銃……コイツまさかあの変態銃使いじゃねえか?!」

「げっ、マジかよ!?!」

「おいおいおいちよつと待て少しウエイト、その変態銃使いつて名前そんなに広まってんの?」

問題の中心点だった露出多めのエルーン少女を他所に、俺の不本意極まりない異名に

ざわつく荒くれ達。

俺の質問を他所に、荒くれ達はそのまま捨て台詞を吐いて酒場から逃げ出していった。

「あ、行つてもうた……もーおっちゃん！折角手がかり得られたのに何するんやー！」  
「いやあお嬢ちゃんや、アレ信じてたの？」

状況的に勝利の筈なのになんか釈然としない俺を他所に、ぷりぷりと怒りを見せ立派な尻尾を膨らませながらエルーンの少女がのっしのっしと俺に近付いてきて文句を言う。

その言葉の内容に俺は、目の前の少女が荒くれ達の言う事を欠片も疑っていなかった事に戦慄しつつ、とりあえず隣の席を勧める。

「おっさん、この娘になんか（安い）飲み物でも出してやってくれ」

「おうよ、（高いけど）甘くて美味しいの特別に用意してやらあ」

俺達の様子に少女はむくれつつ、おっさんが見事な手際で出してきた酒精抜き飲み

物を一口啜れば機嫌を上向きに持ち上げる。

うーん、体つきはともかく世間を知らない幼子とか相手にしてる気分だなコレ。

「自己紹介遅れてもうたな、うちはユエルや。おっちゃんは？」

「おっちゃんではない俺はまだ二十代だ。俺の名はライン、ケチな傭兵だよ」

「そかー……で、ラインのおっちゃん。うちはあのおっちゃんらに騙されてたつて事なん？」

「だからおっちゃんではない。むしろ気付いてなかったお前さんに俺はビックリだよ、どう見ても怪しかっただろ……」

チビチビと甘味を味わいながらこつちに問いかけてくる少女、ユエルの言葉に俺は溜息を吐きつつ安酒をぐいっと呷る。

何のかんのいって10年近くこの傭兵稼業を続けているもんで、あの手の手合いは腐るほど見てきた自信がある。

「その腰に提げてる立派な得物の様子から腕に自信があるようだから、何かあっても大丈夫だと思ったんだろうが……ああいう連中は騙して連れ込んだ腕自慢の女傑を無力

化する術なんざ、幾らでも知つてるといふもんさ」

「そうなんや……せやけど、そんな事してどないするつもりやつたんやろ？　ウチそんな手持ちもあらへんのに」

想定以上に無垢なユエルの言葉に俺は思わず酒場の店主に視線で助けを求め、しかし店主は視線でお前が助け舟出したんだから責任もつて最後まで言えやと述べる。無情な。

「あー、まあなんだ。見た目が良いエルーンの女なんて売り先や使い道はいくらでもあるつてヤツさ」

「え？　それつて、ええつと……そう言う事、なん？」

「どういふ事を思い浮かべてるかは知らんが、まあそう言う事だ」

気まずさの余り目を逸らしつつ、茹で豆を噛み潰しながらユエルへ教授すれば……世間知らずそのものと言える少女とはいえ、さすがにその手の事は知つてたようだ。

顔を真っ赤にし、上目遣いでこちらへ問いかけてくる。やめる俺は悪くないのに物凄く罪悪感感じるだろ！

「お、おおきにな。ラインのおっちゃん」

「だからおっちゃんではない。まあこれに懲りたら少しは警戒心を持つべきだな、何か探し物するならシエロの姐御がやってるよろず屋を頼るのいいだろうよ」

おっちゃん呼びを訂正させつつ、これ以上厄介事に巻き込まれてもゴメンだし店主に会計をしようとし……。

「おいおっさん、なんだこの値段は」

「そりやお前、そこで飲んでるお嬢さんの飲み物代だよ。いやー、ケチで有名なお前が奢るなんて太っ腹だなあ！」

「くたばれこの野郎！」

このクソ店主、俺の意図を察しつつここぞとばかりに稼ぎに来やがった！

やべえ、払えない事ないけど下手すると島を移動する定期便の金にも事欠くぞコレ……。

「ラインのおっちゃん、その。大丈夫？」

「お、おう大丈夫だ。心配するな若者よ」

「どう見ても大丈夫やあらへんやん……せや！ ウチいい事思いついたで！」

めっちゃ軽くなった財布の中身に世の無情をかみしめつつ、心配そうに声をかけてくるユエルに精一杯の虚勢を張る。

さすがにこんな少女に懷事情で気を使わせるのはみつともなさすぎる、なんて考えていたら突然ユエルが何か閃いたとばかりに胸を張りながら声を上げた。

「ラインのおっちゃん傭兵なんやろ？」

「さつきは訂正忘れたがおっちゃんではないと言うに。まあそうだな」

「それなら、ラインのおっちゃんのお仕事。このユエルちゃんがお手伝いするわ！」

恩返しも出来て一石二鳥やでー、なんて朗らかに笑う少女に俺は毒気を抜かれ。

苦笑いを浮かべながら、短い間かもしれんがまあよろしく。なんて言つて手を差し出して握手をしたのだが……………。

この時の俺は思いもよらなかつたのだ。

何のかんの言って目の前の少女、ユエルと腐れ縁が続き途中で合流してきた彼女の親友と名乗るソシエと言うこれまた立派な尻尾を持つエルーンの少女とも引き合わされ。彼女らが抱えていた事情である大騒動に全力で巻き込まれ解決に奔走する羽目になり、やさぐれた少年少女であるコウとヨウの面倒まで見る羽目になるなんて……。

・ ・ ・ ・ ・

「そんでもって今となつては、空に知らないモノは居ないグランサイファアの一員なんだもんなあ。この俺が」

「ラインのおっちゃん！ そっち行つたで!!」  
「だからおっちゃんではない!」

思わず遠い目をしながら振り返つて来た過去から戻つてきた俺は、こつちに牙をむいて飛び掛かつて来たサメに両手に持つたりボルバーの掃射を浴びせて絶命させ。

その瞬間背後に感じた飛び切り危機感に振り向くことなく、最後に一発残していたり



ボルバーの弾丸をサメの眼に叩き込んで怯ませた後全力で蹴り上げて葬り去る。

しかし落ち着いてリボルバーのリロードをする余裕もありやしねえ、なんて思っているのならば舞い踊りながらサメをいなしていたソシエに一際大きいサメが向かっているのに俺は気付くと。

両手のリボルバーを空に向かって放り投げ、背負っていた愛用のリボルバーライフルを構えて巨大サメを狙い撃って吹き飛ばす。

大口径弾故に抜群の反動と燃焼ガスが俺を襲うが、体に染みついた動きはそれらを適度にいなしてライフルを背負い直し……空に放り上げたリボルバーを落とす事なくキヤツチした。

いやもうほんと、どこにでもいる傭兵だった筈なんだけどなあ。俺。

## 話 一般通過傭兵は銃工房三姉妹に頭が上がないというお

襲い来るサメに片っ端から弾薬を叩き込み、調子に乗って突出して孤立するユエルを援護し、その戦い方の仕様かサメに狙われやすいソシエを援護し。

持ち込んだ弾薬も投げモノもあらかた使い切ったところで、漸くアウギユステにおけるサメ騒動は落ち着きを見せた。

ちなみに最終的に鈍器として大活躍した愛用のリボルバーライフルは、見事なまでに銃身が直角に折れ曲がってる。

オーバーホールにどんだけかかるやら……と言うかアカンなコレ。

「コレ、どーすんべ」

「うわあ、派手に壊しちゃったねーラインさん」

「そうなんだよなあ弾薬撃ち切った後だから良かったけど、片っ端からサメをしばいてたらこんな有様に……」

自分の家をやってる銃工房が作った作品だからと、グランサイファーでメンテナンスを買って出てくれるククルにどう言い訳したものかとぼやき。

背後から聞こえてきた声に、いやーまいったまいったなんて言いながら振り返れば。

そこにはにつこりと可憐な笑みを浮かべた銃工房三姉妹の二女、ククルが立っていた。

俺はそつと銃身が折れ曲がった相棒を脇に置くとククルへ向き直り、最近ジンから聞いた最上級の謝罪の作法。

その名もDOGGEZAを敢行した。

「ラインさんの方も大変だったとは聞いてるからさー、アタシもそうとやかくは言いたくないよっ。」

「はい」

「だけどさあ、ラインさんも銃を使う人なんだから。やつちやいけない事くらいわかるよね？」

「はい、重々承知しております」

一回りくらい年が離れている少女に平身低頭する俺、情けないと笑わば笑え！この娘がいなきや俺の商売道具は碌に仕事をせんのだ！！

いかん、自分で言つてて情けないにもほどがある。

「もー、こんなにガタガタにして……これじゃ一から作り直した方が早いよ？」

「し、新造代は責任を持って支払わせてもらいます」

「もー……そんなに縮こまらないでもいいよ？ 新しく造るのと合わせてさ、その、ラインさんに手伝ってもらいたい事もあるし」

さつき脇によけた相棒（大破）をククルが拾い上げると銃を優しくその手で撫で、溜息を吐いて苦笑いを浮かべる。

なんかこう申し訳なさと罪悪感が半端ないので、冷や汗を滝のように流しながら誠心誠意詫げる俺（一桁切り捨てれば20歳）

しかしそんな俺の内心と裏腹に、目の前に立つ銃の専門家と言える少女は怒ってない事に俺内心安堵の溜息である。

「お、おう。俺が出来る事なら何でも手伝うぞ、ククルもそうだけどお前のところには頭が上がないレベルで世話になってるしな」

「もー、そんな風に思ってるならもっと大事に使ってよね？　ま、まあ何でもって言うなら色々とお願ひしたい事あるんだけどさ」

ほら、そんな這いつくばっていいないで立って立ってと言いながら俺に手を差し伸べて立たせるククル、いやあほんと良い子だわ。

実際故郷の島でもククルにアプローチかけてた男は結構いたしな、何でか全部断つてるそうだけど。

「それにラインさんが銃を派手に壊すの、初めてじゃないもんね」

「俺だって壊したくて壊してるわけじゃないんだけどなあ……」

今回大破した相棒は実は三代目なのである。

初代はユエルとソシエ、それにコウが関係している九尾とやらと派手にやり合った際に臨終した。

二代目もまあ似たような案件で派手にぶつ壊したんだが、それはまあ今は良いだろ

う。

「あつちでシルヴァ姉やクム坊と一緒に話そ？ 今回の騒動で出てきた問題点とか話し合いたいしき」

「あ、あー……ええつと、その」

俺の手を取り、今回の騒動の打ち上げをやってる賑やかな方へ俺を誘うククル。

しかし、その、今回ばかりは非常に間が悪い。いやなんというかこうククルが丹精込めて設計しメンテをしてくれた銃をぶっ壊した俺に選択肢はないのかもしれないが。

「ラインのおっちゃーん、待たせて堪忍なー」

「ラインはん、堪忍ね。ちよつと水着の準備に手間取つてもうて……」

そしてこのタイミングで声をかけてきた、俺が日が落ちた浜辺で相棒（大破）と黄昏つつ待っていた二人の声が響く。

いやね、違うんだよ。言い訳をさせてほしい。

今回ユエルとソシエの二人は、なんか水着を新調したらしいんだがソレを着る前に今

回のサメ騒動が勃発。

その騒動こそはまあ様々な人物の死闘と奮闘で収束したものの……。

ユエルとソシエがなんで知らんが、このタイミングで海で俺みたいな年上の男と遊びたいなどと言い出したのである。

数日は後始末やら警戒も含めているんだから無理に今でなくても良いだろ、とは言つたが割と言い出したら聞かないユエルはええから待つといつて！などと言つて走り出し。

無視してどこか行つたら後々面倒になる事は明らかなので、俺は海を見ながら大破した相棒を悼んでいた……と言うワケだ。

「あれ？ ククルやん、どないしたん？」

「……むー」

「あ……」

きよとんとした様子のユエル、そしてそんなユエルを見てむくれるククル、何かを察したような顔をするソシエ。

君達だけで完結せず俺に何が起きてるか説明してほしい、何故か物凄くいたたまれない空気を感じているんだが。

だが、昔から俺を危機的状况から救い出してくれた危機察知能力が俺に警鐘を鳴らし  
ている。

ここに居続けたら、間違いなく地獄を見ると。

喧々囂々、と言わないまでも妙な緊張感を発している3人の少女の様子を注意深く観  
察し、チラチラとこつちを見ていたソシエの視線がユエルの方へ向いた瞬間。

俺は長い傭兵生活で培った隠密能力を駆使し、可能な限り静かにかつ可及的速やかに  
この場から離脱を図る。

そして、有耶無耶に出来そうな距離まであと少しと言ったところで。

「あるえー？ ラーさんじゃないっすか、D Oしたんです？ こんなところで」

愛すべきチャラ男、ローアインに声をかけられた。

俺、君の事嫌いじゃないし割と好きだけどもたまに致命的なところで間が悪いのどうか  
と思うなあ！

しかし時は既に遅し、ローアインに声をかけられたことで俺がさつきまで居た所から  
消えている事に気付いた3人が。



一斉に俺に視線を向けた。わー、気のせいか頭の上にビツクリマークが見えるぞー。

「もー！ラインのおっちゃん！　なんでなんも言わず逃げようとすんねん！」

「こらー！　話はまだ終わってないんだぞー!!」

「ラインはん……うちらと遊ぶの、そんなに嫌なん？」

三者三様の言葉に俺は絶るようにローアインへ視線を向け……あの野郎逃げやがった?!

結局俺はこの後4人で夜の海で遊んだ後、ユエルとソシエも交えて銃工房3姉妹との銃についてのディスカッションを余儀なくされるのであった。

・ ・ ・ ・ ・

「ウボアー」

「ふふ……随分と草臥れた様子だね」

「おっさんは体力がねーです！」

「おっさんではない……」

あの後体力無尽蔵なユエルに振り回され、時にソシエに介抱され。

更にはなんかおつかかない空気を漂わせていたククルに、今回の騒動で出てきた銃の問  
題点の洗い出しに遅くまで付き合わされた俺は……。

見かねた団長に今日は休んでいいよ、と言われる程に疲弊しており今はテーブルに  
突っ伏していた。

ちなみに同じテーブルには銃工房三姉妹の長女かつ凄腕狙撃手のシルヴァと、三女の  
クムユが座っている。

余談だがシルヴァとククルはヒューマンでクムユはドラフであり、3人は銃工房三姉  
妹と呼ばれてこそあれども実際に血の繋がりはない。

まあ下手な血縁関係よりよほど強い絆で結ばれているから、そんな事言うのは野暮極  
まりないのだがな。

「ククル姉が丹精込めてお手入れした銃を派手にぶつ壊すおっさんなんて、おっさんで十分ですコンニャロー!」

「ここらこらクムユ、ラインだつて壊したくて壊したワケじゃないからそんな風に言うものじゃないよ」

机に突つ伏したまま口から魂じみた何かが出る錯覚を覚えながら、しかしクムユの容赦なくも事実としか言いようのない言葉を突つ伏した顔を上げて素直に受け止めていくと。

見かねたシルヴァが苦笑いを浮かべながら助け舟を出してくれた、ありがてえ、ありがてえ。

「おー、そうだクムユ。お前さんが調べてくれた投げモノ大活躍だったぞー、ありがとなー」

「ピャツ?! そ、そそそ、そんな急に褒めても何も出ないですよコンニャロー!」

疲労で碌に頭が回っていないがしかしこのちんまいドラフの少女が調べた爆薬を元にして作ってくれた炸裂弾が、昨日の闘いの中で幾度も危機を脱する助けになってくれた礼

を告げる。

そしたら顔を真っ赤にした手をバタバタさせた後、威嚇する小動物のような様子で言葉を返してきた。

「いや本当だって、ユエルやソシエに迫るサメをまとめて吹き飛ばしたりなんやらと、大活躍だったぞ」

「……このトーヘンボク!!」

「……ライン、昔から思っではいたが君は乙女心を理解する能力だけは致命的に欠けているね」

素直に大活躍した経緯を言っただけで褒めたはずなのにこの扱い、解せぬ。

しかし何のかんの言っただけで少し疲労も落ち着いてきたので、テーブルの上にある更に積まれたビスケットを齧る。うん実に美味。

「まあ、そんな君の事が気になっている私も似た者同士か」

このビスケット良いな、程よい塩味と甘味が疲れた体と頭にスーッと効いていく。

と、いかん。なんかシルヴァアが言っていたのにちゃんと聞いてなかったわ。

「何か言ったか？ シルヴァア」

「……はあ、本当に君ってヤツは……」

「どうしようもねえボンクラです」

「酷くない？」

割と長い付き合いである銃工房三姉妹の内二人からの扱いに、思わず呟く俺。

何度も傭兵として同じ仕事をしているシルヴァアからは、たまにこんな風に口クデナシ扱いされる事は多々あったが……。

小さい頃から俺に懐いていてくれたのに、最近なんか妙にツンケンしてきたクムユからも同様の扱いを受け始めている事に心で涙を流すのであった。

## 一般通過傭兵が褐色露出多めエルーン娘達に連行される お話

毎年夏の風物詩とも言えるアウギユステの騒動を終え、俺が所属する騎空団もまた平常運転へと戻り……。

一方俺はと言えば、ククル達の協力で漸く手元にやつてきたリボルバライフル（4代目）の手入れを鼻歌交じりに甲板にて行っていた。

爽やかな風と時折吹く突風に難儀はするのだが、いかんせん部屋で作業しているとユエルが強襲してきては構えと寄ってくるのだ。

ただでさえ露出が多い恰好してんだからせめて恥じらいは持てと言えば、何故かぶんむくれて枕で叩いてくる始末である。

後からユエルを追いかけてきたと思しきソシエにユエルを何とかしてくれと頼めば……何故か恥じらいながらユエルと一緒に俺みたいなのりえのない傭兵にくつつこうとするから更に混乱が加速するしな。

もうほんと、乙女心とやらはようわからんわ。

「どうせ窮したら銃で殴り始めるでしょとか言われて、銃身の下に斧を取り付けられる機構搭載された時はどうなるもんかと思つたが……いやあほればれする仕上がりだわ」

いやマジで、ほんと良い出来だわ今回は特に。

今までは弾倉に収めてる5発を連続発射すると、たまに暴発する予感するから時々連射間隔が落ちるんだが……今回は前に比べてその頻度も大幅に減っている。

さすがククルにクムユ、いい仕事してるわほんと。シルヴァの指摘もあつてスムーズに仕上がったしな。

そんな感じに上機嫌に手入れを進めていた俺だが、近寄ってくる足音と危機を察知して咄嗟に銃を横の木箱へと立てかけた、その次の瞬間である。

「どーーーーん!!」

「うおおい!?!」

背中に勢いよく何かが進出し、柔らかかではりのある何かを押し付けられた激しい衝撃が俺の身体を揺らすのもつかの間。

そのまま吹っ飛ばされ空を往くグランサイファアの甲板を転がされる羽目となる俺。

「にやふふ、隙ありだぜえ？ そんな隙丸出しじゃあ戦場でやってけないのさライン！

知らんけど」

「お前、今の俺のこの状態見て言う事がソレか？」

天地ひっくり返った姿勢のまま、声の主の方向を見ればそこにいたのは花冠をつけた灰色のふわふわとしたロングヘアと、健康的な褐色肌が特徴的なエルーン……。

そんな見た目とは裏腹に、身の丈ほどもある斧を片手でぶん回し時には敵に投げつけて大暴れする愉快な女こと、ネモネがそこに立っていた。

「わたしさんの突進も受け止められないようじゃあ、まーだまだだね」

「お前、ほんとお前……」

「にひひひ、めんごめんご」

俺が貧弱だと言わんばかりの態度にこめかみをヒクつかせる俺だが、いつもの軽い調子で謝りながら俺の手を引っ張って立たせてくる。



「で、俺は今日は武器の手入れやら帳簿をつけるのやらで忙しいから一日中遊んで過ごすには付き合わんぞで？」

「え〜〜！付き合いわるいぜライン〜！ そんなんじやあ女の子にモテないぜえ？  
多分」

「うっさいわ〜！」

誰が彼女いない歴〓年齢じやい！これでもモテて……モテ、て………いかんやめと  
こう、灰色の独身事情に我ながら泣きたくなるわ。

いや出会いが無かったとは言わんよ？ うん、目の前にいるネモネ絡みの事件とかで  
色々あつたしな。

「ネモ姉〜、ラインいた？」

「おー！妹くん！ここに獲れたてぴちぴちの三十路前独身傭兵をゲットだぜい！」

「だーれが年中女つ気なしの三十路前独身傭兵だコラア！」

ひよっこり現れたネモネの妹ごと、ネモネと同じように髪に花冠をかぶった褐色小柄

エルーンなメルウの言葉を受けたネモネに俺はがっしと音が出る勢いで捕獲される。

コイツ相手の場合、俺の危機察知で反応するよりも早く野生の感やらで確保してきやがるからマジで手に負えねえ……！

若干ネモネの柔らかな体で確保されている現状に役得感を感じなくもないが、そもそも普段からへばりつくユエルやソシエで免疫は出来てるし。

そもそもコイツがこうやって俺を確保してくる時は大体が禄でもない案件の引き金だから、嬉しくはないとは言えないがそれでもめんどくせえ！

「……ネモ姉、ラインまじで言ってる？」

「……多分まじもまじ、大まじだぜい……」

そんな事を言い合ってる褐色エルーン姉妹に揃って溜息を吐かれる、何故だ。

「まあいつか、ネモ姉ー。ルル姉から手紙届いた事、ラインに言った？」

「あ、忘れてたや。いやー、わたしさんとしたことがうっかりうっかり」

「ぐえっ」

てへペろ♪何て言いながら急に俺を放すネモネ、突然の解放に甲板にべしやつと落ちる俺。踏んだり蹴つたりにもほどがある。

付き合いの浅い輩にこんな事されたら流石の俺も、女であろうと関係なくしばき倒すがまあネモネだししようがないわ。

「んで、フェルルカから手紙だつて？」

「うん、はい」

どっこいせ、などと言いながら立ち上がりメルウから手紙を受け取り……部屋で読もうかと思えばここで読めという二人の視線を受け、溜息を吐きながら封を切つて中の分を認める。

「ふむ、ふむ……」

「何が書いてあんのー？」

「ええい引つ付くな、年相応に恥じらいを持ってよお前も」

「わたしさんは難しい事はさっぱりなのだー！」

ネモネのメルウの姉、フェルルカから送られた手紙は彼女達の故郷であるクファア特有の花の匂いがほんのりと香り、ネモネとメルウの姉とは正直思えないお淑やかな女性を想起させる。

そして書かれていた内容は、綺麗な文字で丁寧な挨拶から始まり姉妹が面倒をかけていないかという心配に続き、俺の身体を気遣う内容も書かれており……。

「近況報告とネモネとメルウが元気にやつてるかと言うのと迷惑かけていないか、と言う感じの内容だな」

「ぶー、ルル姉はほんと心配性さんだなー」  
「ん」

俺の言葉に二人は不満げな声音でぶーたれつつも、その顔は気恥ずかしそうで言葉ほど悪くは思っていないようだ。

まあ色々拗れてた姉妹中が修復されたとはいえ、長年に渡るわだかまりもあるだろうに気遣う内容の手紙を送られれば悪い気はせんわな。

いやああの時は大変だったわ、傭兵仕事仲間だったネモネと成り行きで手伝ったり世話した事のあるメルウに……故郷の姉が倒れたとか言う手紙が届いたとかで、何故か俺

が一緒についていく羽目になって。

紆余曲折死闘と二代目リボルバーライフルの犠牲の果てに、奇跡的に死者も出さずクフアの騒動を落着させる事になったからな。二度とやりたくねえ。

「後は仕事が決ち着いたらまたネモネやメルウと一緒にクフアに遊びに来てほしい、とも書かれてるな」

「お〜いいねえ！ あの時は遊べなかつたし案内もできなかつたから、わたしさんはりきつちやうよ〜」

「うん、ボクもさつちやんと一緒に森とか案内したげる」

手紙を読み進めると、最後の方に迷いながら書いたのか若干筆跡が乱れつつも書いてあるのを呼んで二人へ教える。

まあ実際クフアで落ち着けたのは最初の方だけで、後は女王……アライとなったフェルルカの市政に不満がある伝統重視派との小競り合いやら、フェルルカをアライと認めてもらう為の作戦に奔走したりしたからなあ。

最終的に伝統も尊重しつつ、それでも変えるべき因習はゆつくりと変えていくというフェルルカの意思を皆尊重してくれる大団円を迎えられたのだから、まあ苦労した甲斐

はあつたというものだ。

重ねて言うが二度とやりたくねえけど。

しかしこう、俺の危機察知能力が告げてんだよな。

ネモネとメルウと俺の3人でクファに行く、帰ってこれなくなる可能性ある事を。

だが、うーむ。改革の中で疲れて心細いとも書かれてる手紙の内容見るに断るのもなあ……。

「ラインのおつちちゃん、構ってえなー！」

「だからおつちちゃんではないと言ってるだろうがユエル」

そんな風にネモネとメルウに気が付けば引っ付かれてた中考え込む俺の耳に届くユエルの声。

イイ事思いついた、ユエル達とククル達も誘うか！

・  
・  
・

トンチキかつ自身が置かれた状況を毛ほども理解してなかった一般通過傭兵が、複数人の女性と共にクフアへ向かって少し経った頃。

グランサイファーの談話室にて、ラカムを筆頭にした一般的に良い年と言われる男性陣は酒を酌み交わしながら雑談に興じていた。

その中で、ふと何かを思い一瞬口を止め僅かな沈黙の後にラカムが同じ卓についていたオイゲンへ言葉をかける。

「なあ、オイゲン」

「ん、どうした？ ラカム」

「ラインのヤツ……何時頃帰って来れると思う？」

「何言ってるんだラカム、俺はむしろアイツ帰ってこれないんじゃないかとまで思ってるぜ？」

ラカムの問いかけに対してのオイゲンの言葉に、ラカムはだよなあなどと呟きながら酒を呷る。

グランサイファーに話題の種になっている一般通過傭兵、ラインが参加してから同じ

団の一員として少くない死線を潜ったと言える戦友が人生の墓場へ行くかどうかの瀬戸際と言う事実には、心で黙とうを捧げる。

「アイツ、ラインはなあ……見捨てたら寝覚めが悪いだとか儲けに響くとか言いながら、自分だけなら危機回避余裕とか言って死地に平気で飛び込みやがるからなあ……」

「嬢ちゃん達にとつては劇薬みてえなもんだよなあ、アイツも」

しみじみとぼやくオイゲンの言葉にラカムもまたさもありませんと頷く。

オイゲン自身、ラインのクソボケムープに巻き込まれた事が一度や二度じゃないだけに、いつそ人生の墓場に雁字搦めになつちまえばおとなしくなるんじゃないかと考えている始末である。

「あ、いたいたラカム。ちよつといい？」

「ん？ どーしたグラン」

「ラインさんが何時頃戻ってくるか知らないかな？」

危機察知についてちよつと教えて

もらいたい事あったんだけど……」



何とも言えない空気が漂う男二人の中に、騎空団の団長である少年グランが手を振りながらやってくるや否や、どこか切羽詰まった様子で問いかけ。

ラカムから暫く戻ってこれないだろうなあ、などと返す。内心もしかすると帰ってこないかとも思い始めているが、弟のように思っている少年に一般通過傭兵を取り巻く複雑骨折した恋愛事情を言うのも憚られた結果。

微妙にボカすことにしようだ。

「ユエルとかククルとかネモネとか、沢山の女の人に慕われてるのに何時も通りにしていたラインさんにアドバイスをもらいたかったんだけど……」

「あー……グラン、アイツに聞いても多分期待した回答はもらえなかったと思うぞ」

最近特にアプローチが激しくなってきた団員の一部女性達の猛攻を躲す為に、女性事情を外から見る限りは上手くやってるように見えたラインを頼ろうとしていたグランだったようだが。

多分ラインがこの場に居ても何の役にも立たねーよな、なんて地味に失礼な事を思いつつオイゲンはアドバイスを送る。

「あー、その、なんだグラン。俺達で良ければ相談に乗るぜ？　なあオイゲン」  
「お、おう勿論さ。なんでも頼りにしてくれよグラン」

下手をすると第二のラインみたいに女性陣に拉致されていきかねない弟分、グランの様子に危機感を刺激されたラカムとオイゲンの二人は立ったままのグランに椅子を勧め……。

深刻そうな男達の様子に次々とやってきた頼りになる団の男性陣らに、念入りに助言をもらえたグランは何とか直近に迫っていた女性陣のアプローチへ対抗する術を編み出す事に成功するのであった。

なお渦中の一般通過傭兵、ラインは一か月後ぐらいにげっそりした顔で団に戻って来たらしい。

その時に深刻な顔をしてグランに、女性陣に適当な態度を取っていると色々と酷い目に遭うぞ。などと大真面目に語っている姿が目撃されたとかさかれてないだとか。

一般通過傭兵はいかにしてモフモフ尻尾エルーン娘達  
(と男の娘) に懐かれるに至ったかと言うお話

これは既に終わり、大団円を迎えた物語の一節。

かつて暴虐を奮い憎悪と悲しみを振りまいた九尾と呼ばれる魔獣を、かつて九尾を封じた一族の末裔と何故か巻き込まれた一般通過傭兵が討滅した時の話である。

封印された九尾の成れの果て、殺生石と呼ばれている生命を腐らせ朽ちさせる瘴気を放つ怨念に満ちた存在を確認したユエル達は。

一度対策を取るために宿を取っている村へ戻ったのだが、そこでソシエは部屋を抜け出したコウが自身の身体に封じ込められていた九尾と話す姿を目撃してしまう。

しかも、その内容と言うのが……九尾の依り代であるコウが、九尾の復活直前に自害すると九尾へ宣言するという内容であった。

最初こそは村人を殺生石に近付け無い為とはいえ、瘴気に犯された作物を村人達に食べさせない為に目の前で野菜を踏み潰すと言った行為を行ったコウと言う少年に眉根

を潜めたソシエであったが。

その根本にあるコウと言う少年の優しさと、自身の一族が九尾復活の引き金になったという事情からくる自己犠牲の精神にやがてソシエは心を痛め……。

コウを犠牲にするのではなく、九尾を封じた一族の末裔である自分が何とかしなくてはと言う気持ちから一人殺生石の下へと赴いたのである。

その行為もまた気高く、夢で何度も見た復活した九尾が人々や親友達を食い荒らす光景を阻止する為と言う想いから出た行動であったのだが……。

悪辣極まりない九尾にとっては、それすらも想定範囲内であった。  
そして。

「ソシエ、ソシエえー！」

「待て、ユエル!!」

「ユ、エル……ちや……ふ、めん……ね」

ソシエと言う心優しき少女は、夜中に抜け出した親友を追いかけてきたユエルの目の前で。

その身体を業火に包まれた。

「ああ、ああああああああああつ!!!」

「離せつ! 離してやおつちゃん! ソシエがつ! ソシエがあつ!!」

「行くなと言っているんだ!!」

業火に包まれ獣じみた絶叫を上げるソシエへ向かって駆けだそうとするユエルの肩をラインは乱暴に掴んで押し留め、腰に差していたリボルバー拳銃を構える。

ラインを今まで幾度も死線から救ってきた危機察知能力は、その全身全霊を以って警鐘を発しており一筋の脂汗が男の額から頬を伝って地面へと落ちる。

今、ユエルを押し留めているラインは半ば確信していた、この場に留まると避けられぬ死を迎える事実を。

そして、ソシエと言う少女はラインとユエル、コウの3人の目の前で全身を青白い炎のような体毛に包まれた狐型の魔獣へと変貌し。

悪意にその瞳をぎらつかせながらその身を躍らせユエル達へ襲いかかる。

「ツチイ!!」

乱暴に押し留めていたユエルを襲い掛かる魔獣から遠ざけるようにラインは突き飛

ばすと、片手にリボルバー拳銃を持ったまま九尾へ向かって駆け出す。

「ラインのおっちゃん!？」

「ラインさん、危ない!!」

自ら突っ込んできた哀れな獲物に九尾は口角を吊り上げながら、男を引き裂こうと爪を振るう……が。

ラインは可視化されるほどに濃厚な殺意から攻撃の軌道を予測し、スライディングしながらとびかかって来た九尾の一撃を紙一重で躲すと隙だらけの背中へ向けて銃弾を連射する。

生半可な魔物の甲殻も撃ち貫ける弾丸、しかしその弾丸は九尾に僅かな痛痒を与える事も叶わなかった。

「クソがあ! 通常弾じゃまともに通じやしねえ!」

「ら、ラインのおっちゃん! アカン、アカンよソシエが死んでまう!」

「安心しろ! 殺しはしねえし傷も残らないよう善処するわ!!」

「くくく、随分と生きが良いのう。我を前にしてそのような大言を吐くどころか、最早取

り戻せぬ依り代の事まで救おうとするとはな？」

予想こそしていたが、それ以上に効果が薄い事に舌打ちをするラインに対して、我に返ったユエルが必死な声音で叫ぶ。

一方で九尾は……自身に歯向かってきた小物、ラインへ嗜虐的な視線を向けながらこの場にいる者達の絶望を煽り愉悅を味わうべく残酷な事実を告げた。

突然の九尾の言葉に目を見開くユエルは、震える声でどういふことかと九尾へ問いかける。

「今、我は気分がいい。ククク……存分に話してやろうとも」

そして九尾は語り出す。

自身が再び蘇るには依り代が必要であり、本来ならば少年のコウがその役目を担う筈であつたが気が変わった事。

のこのことやってきた自身を封印した壺之王、祖の血筋の末裔であるソシエを血肉にするのも一興だと。そう思っただけでしかない事。

故に自身の依り代候補だったコウに、解放してやる代わりに壺之王の子孫であるソシ

工を騙せと囁いた事を。

「……………」

九尾の言葉にラインがチラリとコウへ視線を向けると、少年は下唇を噛みしめながら俯き。

話を聞き終えたユエルは、その目を吊り上げ激昂しながら叫ぶ。

「そんな事、どうでもええ！ソシエ……ソシエや！ ソシエを返せっ!!」

ユエルの言葉に口角を吊り上げながら嗤う九尾、そして言葉で弄びながら依り代となったソシエの身体を使い。

ラインの射撃よりも早く、ユエルの喉を引き裂こうとした。

その時である。

九尾が放った一撃は、ユエルの薄皮一枚を貫いたところで止まっていた。

そう、九尾の依り代となったソシエが必死に抗ったのだ。

未だソシエが消えていない事にユエルは希望を取り戻し、今も尚抗っているソシエへ



呼びかける。

しかし九尾の力が余りにも強いせいか、その呼びかけも空しく九尾は自らの身を包み込むように業火を巻き起こすと、どこへともなくその姿を消した。

そして後に残ったユエルは、静かにコウへ……九尾が言っていた事は真実かと問いかける。

コウは俯きながらユエルの問いかけに肯定の意を示し、生まれた時から九尾の依り代となつて死ぬことを定められていた苦しみを吐露するも。

その話を聞いたユエルは、コウへ解放された今の気持ちはどうかと問いかけると、コウは端正な顔を歪めボロボロと涙を流しながら九尾の依り代となるためだけに生かされ続けていた頃よりも……今の方がずっと苦しいと。

一族や九尾に囚われていたあの時よりも自由な筈なのに、自分に優しくしてくれたソシエを生贄に捧げる真似をしてしまい、取り返しのつかない事をしてしまったと泣き叫ぶ。

崩れ落ち泣きじゃくるコウに、ユエルは歩み寄るとそつと彼の小さな頭を撫でて口を開く。

「ようやく……ちやんとごめんなきいって、言えたな」

自身もまた親友が奪われて悲しく苦しいのに、優しく微笑みながら泣き続けるコウの頭を撫で続け。

ソシエに謝るためにも、頑張ろうと手を差し伸べる。

ラインは二人の光景を静かに見守ると、何か腹を括ったような顔をして頷き音を立てずにその場を立ち去った。

そして、全身にこれでもかと銃や手りゅう弾、果ては手斧をぶら下げたラインが目にした物は……。

「あれ？ ユエルお前、なんか衣裳変わったな……漸く恥じらいを覚えたか？」

「ラインのおっちゃん！ どこ行っとったんや……って、ものっそい重装備やな」

「今回ばかりは採算度外視で大暴れしてやる、で。コウ、すっかりユエルに謝ったか？」

「はい……ソシエさんにも、全部終わったら謝ります」

「それならばよし、だ」

ラインが宿に置いていた荷物や装備を取りに行ってる間に、ユエルがコウの持つていた神器を手にし爆発炎上したが……コウの協力もあり、ユエルはぎりぎりのところで神器に認められたりしていたのだが。

肝心の光景を見そびれたラインはと言えば、すつとぼけた調子でそんな事をのたまう始末であり……いつもと変わらない男の姿に、ユエルもまた緊張が解れたかのように笑みを零す。

余りにも気の抜けた様子の二人の言葉に呆気にとられるコウであったが、ラインに視線を向けられ投げかけられた言葉に、しっかりと頷いて返事をすれば。

その返答にラインはニイと笑みを浮かべ、大股でコウへ近寄るとその頭を耳ごと乱暴にがしがしと撫で回す。

年上の男性に親愛の情を込めて撫でられたことなかったコウにとって、それは初めて得た父性のような存在であった。

そして三人は、主にユエルとコウが感じる九尾の禍々しい気配の導くままに森の奥へと足を踏み入れ、やがて一行の前にソシエが現れる。

その姿にユエルはソシエの名を叫ぶも、ソシエの姿をした九尾はたちまち魔獣の姿へ

とその身を変えた。

「アカン、ソシエの……ソシエの気配が……」

「諦めるなユエル！ コウ、俺が時間を稼ぐからユエルのケアとソシエを取り戻す作戦任せたぞ！」

「は、はい！」

茫然と立ちすくむユエルに九尾の攻撃が行く前にラインは腰に提げていた散弾銃をぶっぱなしながら九尾へ向かって走り出す。

「ほう、また貴様か。良かろう、少し遊んでやるとしようか」

何ら痛痒の感じない代物で必死に抵抗をしてくる存在に、青白い炎の姿から全身を白い毛皮に包まれた魔獣へ変貌した九尾は醜悪に笑みを浮かべ。

其の巨体からは想像もつかない俊敏さでラインへと襲い掛かる。  
が。

「貴様……何故、私の爪が当たらぬ？」

「そんな見え見えの殺気、当たるものかよ。1000年も眠っててボケたんじゃねえか？」

「ほざけ、一息で縊ってくれるわ」

甚振るように振るった爪、鬱陶しい逃げ足を潰そうと噛み砕こうとした牙、それら全てを躲しきった小物でしかない男の言葉に。

九尾はその身を冷徹に細めると、その身をかがめ必殺の一撃を……今も危機察知能力がガンガン警鐘を鳴らしている状態のラインへ向かって放つ。

しかし。

「それも、読めていたあ!!」

「があっ!？」

一瞬でも間合いを誤れば即死する状況の中、アドレナリン全開の獰猛な笑みを浮かべたラインは肩口に浅くない傷を刻まれながら両手に構えたりボルバ―拳銃を九尾の顔面目掛けて一斉射撃を叩き込む。

いつも装填している弾薬よりも炸薬を増やした強装弾を全弾、急所と言える顔に撃ち込まれた九尾は苦悶の声を漏らしながらたたらを踏み、俊敏な動作で一足飛びに後ろへと飛び退る。

初めて、漸く与えた有効打であるも規格外の弾薬を連続で発射する形となったラインのリボルバー拳銃は大破し、傷も相まってラインもまた無傷とは言えない状態であった。

「良くも我に痛みを……小物風情が……！ 殺してやる、その腸生きたまま引きずりだしてくれようぞ！」

「はんつ、俺みたいないな一般通過傭兵を殺せない獣風情がほざいてんじゃねえよ」  
「……殺す」

自身を侮っていた九尾の言葉にラインは、コウとユエル早く何とかしてくれなどと内心冷や汗を流しながらも九尾を煽り続け。

そのおかげと言うかやりすぎというか、九尾はドス黒い怨念と殺気を隠す事なく全身全霊で小物と侮っていたラインへと襲い掛かってくる。

先ほどまでと違い、九尾に飛び掛かれる度にラインの身体のどこかから血しぶきが

送り、しかしラインもまた攻撃される瞬間に持ち込んだ重装備の数々。

それらの全て……手斧や手りゆう弾、時には弾切れした散弾銃を鈍器代わりに振るったりするなどしてとにかく時間稼ぎに徹する。

そう、ラインは確信していた。

自身が持つ装備や技術、火力では目の前にいる九尾からソシエを救い出す事どころか倒す事すら不可能だと言う事実を。

故にこそ戦いを挑む前に、九尾の事をこの中で一番熟知しているコウに頼んだのである。

しかし。

「捉えたぞ!!」

「ぐはあっ!?!」

ほぼすべての武装を使い切り、もはや背中に背負っていたリボルバーライフルの残弾も残り一発となった状況で、ラインはとうとう九尾の一撃をその腹に受けてしまう。

その激しい一撃は成人エールン男性であるラインの身体を軽々と吹き飛ばして肋骨を何本も砕きへし折るどころか、ラインがぶつかった木々すらもへし折るほどの一撃で

あった。

余りの衝撃に愛銃を取り落としてしまい口から血反吐を吐くライン、その有様に九尾は鬱陶しい小物を漸く始末できると言った形相を浮かべながら恐怖を与える為にゆっくりと近付いてくる。

最早万事休す、手立てなど何一つないという状態であるも……いつもなら五月蠅くラインに危機を訴えてくる危機察知能力はラインに何も訴えてくる事はなかった。

何故ならば。

「そこまでや、九尾い!!」

「ほう? 今更我の前に立ち塞がるか」

コウの呼びかけによって立ち直ったユエルが、双剣を手に九尾の前に立ち塞がったからである。

自分よりもかなり年下の少女に庇われるなんてしまらねえなあ、などと血を吐きながら霞んだ視界で少女の背中を見守るライン。

「大丈夫ですか?! ごめんなさい、遅くなって……!」



「げふ、がふ……いいってことよ、それよりコウ。あのへんにさ、俺の銃転がつてる筈……だから持って来てくれるか？　もう……立てねえし目も……霞んで、きたんだわ」

「後は僕達で何とかしますから、ラインさんは休んでて！」

「こんぐらいの怪我あ……何度もしてきたつての、一発……撃てれば……十分だからよ。頼むわ」

自身を心配して休んでほしいと懇願するコウの頭を震える手で乱暴に撫でながら、痛みに顔を歪めながらも笑うラインの頼みに……コウは無理しないでください、と言いながらも近くに転がっていたラインの相棒と言えるリボルバーライフルを手渡すと。

ユエルに加勢すべく前線へと駆け出していき、ラインはその後姿を見送りながら懐から運よく割れてなかった痛み止めのパーションを飲み干すと、必要なタイミングで援護射撃をする為にゆつくりとリボルバーライフルを座ったままの姿勢で構える。

やがてラインの視線の先で九尾からソシエが助け出され、依り代を喪った事で力を喪った九尾を封印すべくユエルとソシエ、コウの3人は祖先から受け継いだ九尾を滅する為の舞を舞い始める。

しかし、九尾もまたソレをただ黙って見ている事はなく……討滅の足掛かりとなる舞を舞おうとするソシエへ飛び掛かり、封印の阻止と依り代の再確保を目論む。

だがその狙いが叶う事は、なかった。

後一步でソシエに九尾の爪が届こうとしたその瞬間、轟音と共に飛翔した弾丸が九尾の顔を撃ち貫いたのだから。

「があああつ!? 小物、風情があああああ!!」

「はっ、言つたら……? 一発、撃てれば、十分だつて……な……」

小物と侮り、しかし自身の野望を小癪なほどに阻害してきた男へ向かつて激昂の咆哮を放つ九尾に向かって、血を吐き出しながらニヤリと浮かべた笑みを見せつけるライオン。

しかしその代償は大きく、吹き飛ばされた時に銃全体にガタが来ていたりボルバールイフルは大破し……重症の状態で激しい銃の反動を身に受けたラインは、そのまま意識を失う事となる。

その後の結末を述べるとするならば、九尾は未だ自身の残滓がこの空の世界に散らばっている事をユエル達に告げながらも討ち滅ぼされ。

ついでとばかりに、今度こそ貴様を殺してやると気を失ったラインへ向かつて宣言をしていたが、当の本人はそれどころじゃなく。

「……………なーソシエよお、そんな甲斐甲斐しく世話せんでも大丈夫だつて言つてんだろ？」

「アカンよラインはん、折れた骨が内蔵に突き刺さったりもしてたんよ？ 絶対安静や」  
「ソシエー、ラインのおっちゃーん！ 村の人達から栄養満点の御野菜もろてきたでー！」

九尾が封じられた殺生石の近くにあった村……ユエルとソシエに尻叩きを受けて怒られたコウがごめんなさいして許してもらった場所の宿の一室にて。

全身包帯ぐるぐる巻き状態の一般通過傭兵は、もふもふした尻尾を持つエルーン娘二人に甲斐甲斐しく看病を受けるのであった。

「あ、コウ。なあコウ、助けてくれ、この二人俺の風呂の世話どころかシモの世話までやろうとしやがるんだ！」

「あ、あはは……その、お大事にしてください。ラインさん」

「コウ？ コーコーコーウ！ 待っておいでかないでえええ?!」

そして平和になった村に、一般通過傭兵の懇願するかのような情けない叫び声が響くのであった。